

《子どもの成長を「待つ心」が大切》

生まれてすぐの赤ちゃんは寝ているだけです、やがて手足をバタつかせます。子どもは自らの成長に必要な刺激を求め、自分自身を成長させているのです。バタつかせるのは、手足の運動ではなく、動かすことで体幹を揺らし、重力に対して自身がどのような体勢でいるかを知るためです。また、生物として動く必要があるので寝返りを行い、生物の進化をたどるようにハイハイし、歩き始めるのです。



本来、自ら行うこの成長段階のすべてが、子どもの学習や様々な能力の向上に非常に大きな意味を持ちます。例えば、人生80年と言われる一生のうちの十数時間、赤ちゃんは自分で骨盤をひねり、体幹から動き出す寝返りをする事で「自ら

困難を乗り越え、試行錯誤し、ものごとを成し遂げる」ことを覚えます。

しかし、周りと比べたり、育児書などに書かれた月齢の目安を意識しすぎたりして「もう〇ヶ月だから寝返りできないとダメだ」と自ら湧き出てくるはずの寝返りを無視し、大人が腰を押すなどしてしまうと、赤ちゃんは自ら動いたときに覚える刺激が得られず、運動能力や学習能力など様々な面で問題が起きてくるでしょう。

子どもの自然な成長を促すためには、大人の不自然な協力は必要ありません。子ども自身が成長するための豊かな環境を作ってあげること、そしてなにより子どもの成長を「待つ心」が大切です。



★次回「学校などの取り組み③」をご紹介します。

本庁舎学校教育課 内2365



未来へつなごう「仁」のこころ

白河戊辰戦争回顧録

第6回 萩〜白河子ども心ふるさと交流事業

戊辰戦争の折に、長州藩の兵士たちが白河の盆踊りを持ち帰り、今でも山口県内各地に「白河踊り」として伝承されている縁で、8月4日から3日間、市内の小学生16人が山口県萩市を訪れ、市民の方たちと交流しました。

◆1日目 (8月4日)

萩・石見空港に到着後、萩市の小学生とともに萩博物館を見学しました。

◆2日目 (8月5日)

松下村塾(世界遺産)や松陰神社を訪れ、同塾で吉田松陰の生涯や当時の塾に関する講話を聞きました。また、萩焼の陶芸体験や明倫学舎の見学を行いました。

「白河踊り交流会」では、白河踊り研究家の中原正男さんの講話を聞き、藤道健二萩市長をはじめ、萩市民と一緒に白河踊りを踊りました。

◆3日目 (8月6日)

「快水浴場百選」に選ばれている菊ヶ浜で海水浴を楽しみました。白河の子どもたちは萩市内に民泊し、3日間萩の子どもたちと過ごして交流を深めました。今後も両市の交流を続けていきます。



▲全員が輪になって白河踊りを踊りました